

子ども自身が権利を行使するための安全基地

子どもの権利擁護委員 小林 央美



逸話を裏付ける根拠が見えてきた

前回までは、子どもが課題に向き合いよりよい解決を行うために社会情緒的能力が必要であり、その能力は個人差が大きく二極化していくのではないかという懸念にふれました。しかし、大人のかかわりによって、それを解決できる可能性が見えてきています。

例えば、これまで、子どもが反社会的なことをしてしまった時に、大人や教師との信頼関係や温かい関係性によって改善されていくというようなことは、逸話としてよく聞くことでした。研究途上ではありますが、このような逸話を裏付ける調査結果が出てきました。

幼児期の社会情緒的能力が芳しくなくても、小学校高学年以降に大人や教師との信頼関係を築くことができた子どもは、社会情緒的能力の目標を達成する力（実行機能）と他者とのかかわる力（向社会的行動）を向上させることができたというものです。

子どもとの信頼関係をつくるという大人の努力は、とても当たり前ですが難しいことでもあります。しかし、その重要性が科学的データで証明されたことは、大人として頑張りがいがあります。

養育者とは別の安全基地になる

アタッチメントは、養育者と子どもの情緒的な結びつきのことで、社会情緒的能力の発達に重要な役目を果たします。子どもが泣いたり、笑ったりすることに対して反応することで、他者を親切で愛情深い存在と認識したり、自分は愛される存在としての自己認識を形成していきます。他者を信頼するための中核となるようなものです。

今回のデータからは、万一、幼少期に十分なアタッチメントが形成されなくても、特に小学校高学年以降に教師など養育者以外との信頼関係が成り立つことで、養育者とは別の安全基地を得ることができ、自他を大事にしながら課題解決に向かうことができるようになる可能性があるというものです。



安全基地となるために大人としてできること

信頼関係を形成する上での基盤として、①子どもの身体的・情緒的ケアを行う、②持続性・一貫性のある存在であること、③子どもに対して情緒的なかわりをすることが上げられています。ここでの身体的ケアとは発達段階に合わせて、身体を気遣うということも含まれると考えます。丁寧に子どもの心身を思いながら、根気よく子どもとかわることとっていいでしょう。そしてそのかわり方は、子どもの成長する力を管理的に支配するのではなく、その子どもの伸びようとする力に伴走するということです。これまで言われてきていることですが、「しっかりと、最後まで話を聞く、子どもに転ばぬ先の杖を与えることなく、上手くいった場合も失敗した場合でも、その挑戦や体験の過程を尊重する」ということになるでしょう。こうした安全基地で子どもは自身の権利行使を行う勇気を得ることと思います。

